

ミモザマンマクリニックに大変惹かれている。ミモザ、マンマ、クリニック、そこには何があるんだろうと思う。ピンクの看板の乳腺外科。乳腺外科って始めて聞いた。おっぱいをどうするのだろう。その隣の隣の通りに耳の遠いおじいさんがやっている本屋がある。古本と新本がどちらも置いてあって、お客さんの声が聞こえないものだから、おじいさんは取り敢えず、こちら新刊！ 新刊！ と大声を出す。やたら芥川賞を勧めてくる。おじいさんはきつとミモザマンマクリニックを知らない。私は本屋の中で聞こえるくらいので声で呟く。「ミモザマンマクリニック」。

ミとモの間に惹かれている。ミの後にすかさず下唇を上唇に付けなきゃならない。ミもモもマンマも一度唇を閉じないと発音出来ないのだ。この町の名前だって。昔城下町だった名残で町の道は碁盤の目のように格子状になっていて、自転車で走るととっても走り易い。ぐねぐねした道がない。でも、城下町だった名残で狭い通りが多くて一方通行が多い。車だと走りにくい。直進する車があるのに右折をする文化が生まれ、町の名前を冠して「○○曲がり」という。「○」も「○」も「曲がり」も唇を閉じないと発音出来ない。「○」、私は唇を破裂させる。唇が待っている。マと言った唇がすかさず破裂するのを待っている。

ミとモの間にあるのはムメのはずなのに、無名の所なんてない。通りには全て名前が付いていて、皆がその上で横断歩道が変わるのを待っている。青の点滅や、車が全く通らない時でも誰も絶対に渡らない。歩車分離式信号という、歩行者の信号が青になるまでの時間が長い信号が町には多いのに、誰も文句を言わないで待っている。その間に一体何回ほしゃぶりたいと言えるのだろう、と私は文句を言う。もんく。これだって唇を破裂させる。

ミとモの間で皆何かを待っている。何を待っているのだろう。女鳥羽川という川が流れていて、城を建てる時に人の手で曲げられたのだという。「めとばがわがまげられた」。町の至るところに水路と湧水があつて国の名水と呼ばれ、その何処かにニジマスが住んでいるという。信号待ちの間に探しても私はニジマスを見つけれなかったけれども、きっとこの町の人達には見つけられる。もうずっと信号を待っているからだ。

ナベリンファーマシーにもとても惹かれていた。ミモザマンマクリニックから一番近い調剤薬局で、ミモザマンマクリニックで診察が終わった人達は皆ナベリンファーマシーの入り口に吸い込まれるはずである。ファーマシーは薬局という意味で、そういえばと思って乳腺外科のことを調べたらマンモグラフィーで乳房のしこりを調べるところらしい。マンモグラフィー。マンモスみたいだと思って、私はマンモスみたいなユートピア美容室のことを思い出す。レトロな看板にレトロな内装の店主は後期高齢者のマシンガントーカーのマダムで、前髪を切つてあとは伸ばしてと言うのを全無視して10cmも切られた。町には美容室が一番多くて、でもお洒落をしてもイオンしか遊ぶ場所がない。町は廃れている。けれども皆何処にも行かずに、静かに何かを待っている。何をだろう？ マダムに聞いても美容室が多い理由はわからなかった。

「ミモザマンマクリニックのことを知っていますか。」アタシは娘を一人で育てて先週ボーイフレンドと山登りに行つて、この町では車がないと生きていけないわよ。マツダのマークの。店まではママチャリで来ました。そう。もう少ししたら車買えたら良いわね。

ようこそ○○へ。

マンモグラフィーは乳房を板で薄く挟んで撮影します。私はこのマダムならマンモグラフィーくらい経験がありそうだと思うけれど、マシンガントーカーに邪魔されて口の中でマンモスと一緒にモグつかせる。マンモグラフィー。ユートピア。理想郷。

もうすぐパルコは潰れるけれども、ミモザマンマクリニックは待っている。ナベリンファーマシーは待っている。イオンがあつて名水があつてニジマス

が待っている。破裂するのを待っている。大雨で女鳥羽川が決壊して町が浸水した。中町と餌差町と博労町が火事で焼けて、中町通りのなまこ壁が出来た。なまこかべ。そう呟く唇は破裂するけれども町の人たちはずっと待っている。ということはつまり何処にも行かないで、電車は一時間に一本しかないし誰も乗らない。この町で生きるのには車がマスト、一方通行ばかりで曲がり道も回り道もしなければいけない。そうして待っている。誰ももしく、を言わずに、破裂させずに待っている。壊されるはずだったけれども市民が守ったお陰で、町の真ん中には〇〇城が今もお建っている。〇〇。唇が待っている。壊さない、この町の人達は皆優しい。町のおっぱいである城に私がまだ行ったことがないと言っても、きっと誰も怒らない。もしも耳の遠いおじいさんの耳元で私が呟いても、だろうか？ 町が破裂する。あそこにはよく行くんですけどね。ミモザマンマクリニツク。

ミモザマンマクリニツクの隣の隣の通りの本屋には二階があって、そこで夜おじいさんがモグモグしているのが窓から見える。私はあれがおじいさんの居城なのだと知り、明日入って来る新刊をわざと耳の遠いおじいさんの本屋に行って買うのを決める。おじいさんはまたどうぞ！ と毎回大声で言うのも忘れず、私は町の皆と一緒に、田舎だから新刊が発売日から遅れて入るのを、破裂させずに、心から待っている。